

D O N C どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 津市東丸之内21-4 オーデンビル

3F / Siege : Oden Building 21-4

Higashi Marunouchi Tsu JAPON

N° 40 avril 1997 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

フランスにおける日本年 リオン市「日本フェスティバル」より 本会・浜田さんらに箏曲演奏の要請

前号でご紹介したように、今年4月から来年3月まで「フランスにおける日本年」として、パリを中心にフランス各地で日本のすぐれた文化を紹介する多彩な催しが繰り広げられますが、パリに次ぐ大都市の一つ、リオン市の「日本年」準備委員会から、このほど11月18日の「日本フェスティバル」オープニング前夜祭などに、本会会員で昨年パリのイベントで琴を演奏した実績をもつ浜田文登勢さん一門に対して、箏曲を演奏してほしいとの要請が届きました（リオンに本拠をもつラヴェル弦楽四重奏団のバイオニスト北浜玲子さんとの共演も交渉中）。基本的に日本側の出演等はボランティアということになっていますが、イベントの公的な性格もあり、また出演者のご希望もあって、三重日仏協会の派遣事業として取り組むことを検討しています。

またこの機会に「フランスの日本年」視察を兼ねて同行の旅行団を、という希望も会員から出ており、定期総会までに具体化する方針です。

'97年度総会 7月6日(日)に

1997年度定期総会を来たる7月6日(日)午後、津市の都ホテルで開催します。引き続き、記念講演会とレセプションを開催しますが、ゲスト等は現在交渉中で、会員には改めて詳細をご案内いたします。

会員のページ

三重・フランス・フランス語

仲井 秀 昭 (☎& FAX : 0742-43-1430)

一昨年入会した仲井と申します。よろしくお願ひします。

住いは奈良県ですが、家内の実家が安芸郡河芸町にあり、縁あって、入会させていただきました。

私自身の三重に対する「思い」を言うと、今や結婚17年目を迎えた古女房（失礼！）との関係になってきますが、井土事務局長ご夫妻にお会いする度に、自分も少しは奥さん孝行と自責の念に駆られ、せめて昔に遡ることで、現在の自分を振り返りたいと思います（答えになってませんね）。

家内に出会ったのは大学2年生の時。向こうは新入生で、ギター部の後輩でした。

私の実家は京都府笠置町という、本当の山中にありました。大学のあった人口数万人の地方都市でさえ、都会に見えた位です。

この山中で、開店休業状態にあった家業の旅館の部屋に一人閉じこもって（食事も一人）本を読む青年でした。田舎を嫌悪する反面、人通りの途絶えた夜の静寂を一方で愛しました。

外に出での社交と内に籠もっての孤独好きの二重性は今でも基本的には変わりませんが、家族というミニ宇宙を常に接することで、孤独が必然的に薄められることは、いいことでしょうか？あるいは、パスカルが説く人間存在の置かれた深淵に一人向かう時間は、その深淵に飲み込まれてしまう前に、常に確保すべきなのではないでしょうか？

で、実家のある京都府南部から三重に向かった時に、何が起るか、何が見えたかということ、「広がり」です。柘植から関、あるいは亀山から津の一身田、あるいは近鉄で青山から中川。そこにある「広がり」は普段、三重県に住んでいる人は意識していないかもしれませんが、それが三重なのです。

義母も、何度となく娘に請われて、奈良に手伝いに来たあと、山から平野に出たときに「解放感」を感じると言っていました。あるいは、それは単に地理的なものだけでなく、多少「解放感」の少ないかもしれない関西人の性格から解放されたという思いもあるかもしれません。

この広がりのある思いが、家内と知り合い、結婚するにいたった頃に、恋愛感情と微妙に重なっていたものと思われます。

どうしてフランスかと言うと、もともとドイツ文学が好きで（今でも音楽はじめドイツ的なものは自分に“合っている”と思います）、ヘッセやマンを愛読していましたが、よりリアリティ

ックなものを求めて、フランス文学を読みはじめたのです。そこにあったのは、土地であり、血であり、肉体が知る孤独でした（バルザック、ゾラからサルトル、カミュ）。

という訳で、大学に入るときにフランス語専攻を選んだのですが、学校の勉強や受験勉強に関しては、私はとんでもない劣等生だったので、英語の背景なしに、いきなり入学して、カミュのL'ETRANGERを自分で買って読みはじめたものの、大変な苦勞でした。しかし、普通の勉強は出来ない人間！だったので強引に読んでいたら、多少は分かるようになってきました。

社交と孤独という相反する性格ということでは、読むことが好きな一方、中学・高校時代も英語の成績は10点以下であったにも関わらず、奈良公園で外国人観光客に英語で話しかけて級友を驚かせたことがありました。もともと、外国語を話すことに対する違和感は比較的少なかったようです。

いま現在、あちこちの関西の大学・短大で非常勤講師としてフランス語を教える一方、奈良日仏協会の事務局長としても、いろんな活動をしており、奈良という京阪神、どこへでも行けるという地理的状況を生かして、行動範囲を広げてゆきたいと思っています。

フランスへは21年前に2カ月滞在しただけで、それ以来戻っていません。フランスとの通信の機会もあり、友人も増えたのですが、フランスそのものはますます抽象的なものになってゆきます。一度、また、行こうかな？

最後に、最近、パソコン通信にこっています。パソ通をやっている方がおられれば、《E-MAIL : CZK10421@niftyserve.or.jp》までメール下さい。お返しします。

FELICITATIONS

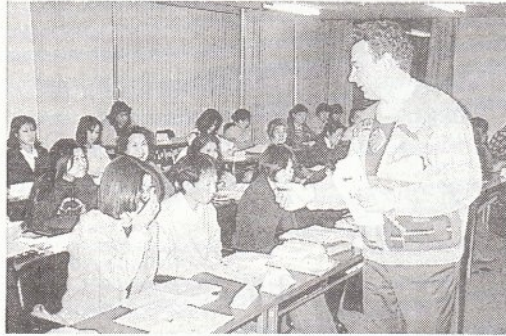
仲井秀昭氏にフランス教育文化功労章

上に掲載した随想の筆者、本会会員で奈良日仏協会の事務局長・仲井秀昭さんは、その長年にわたる日仏文化交流活動などを評価され、このたびフランス政府から教育文化功労章（Chevalier de l'Ordre des Palmes Academiques）を贈られることになりました。受章式は、4月29日、奈良ガーデンホテルで、ジャン＝ベルナル・ウーヴリュエ駐日フランス大使を迎えて行われる予定です。

今年も本会会員杉本さんが第1位 第2回全国ワインアドバイザー選手権大会

日本ソムリエ協会主催による権威ある上記のコンテストは4月20日大阪市内のホテルで開催されましたが、これに出場した本会会員・杉本静彦さん（四日市市）は約300人からの予選、準決勝を勝ち抜き、最後の6人の決勝でも最優秀の成績で、念願の第1位を獲得しました。前回の長田康二さん（津市）に続いて連続三重県勢の優勝でワイン界でも話題となっています。

大盛況のフランス語入門講座



本会主催による今年度のフランス語入門講座は、ダメモ先生を講師に、3月第1週から毎週月曜日夜津市の第一ビルで開かれています。今年は会場が広くて定員を制限しなかったこともあって、かつてなかった約40名の生徒が受講、熱気のある授業風景です。5月末日まで12回で終了。

一方、みえエデュケーション・ネットワーク主催によるダメモ先生の「入門講座」が4月から松阪市のダメモ邸で始まっています（本会後援）。受講料は12回で12,000円と低料金。世津子夫人（パリ国立美術大学卒）の絵画教室と併せて、本会会員のご参加または生徒さん紹介をよろしく。

ご紹介 新しく来県フランス人 シャルル夫妻

久しく新しいフランスの方の参加がなかった「三重日仏」でしたが、昨年末から津市に若いフランス人夫妻が来られ、私どもの活動にも参加していただけることになりました。津市の西、安濃町にある農水省野菜茶業試験場の研究者として赴任されたジャン=フィリップ・シャルルさん(31)と夫人のシャンタルさん(27)。

ジャン=フィリップさんはブルゴーニュ・ワインの中心地コート・ドールのSAULIEU出身、ディジョン大学で生物学を学び、ある作物の害虫における生化学の研究で92年同大学の博士号を取得されたのち結婚。シアトルのワシントン大学に渡って昨年までそこで研究活動。さらにその研究を深めるために日本にやってきました。

シャンタルさんはシャンパーニュ地方オートマルヌ県LANGRE出身、やはりディジョン大学で法学を学ばれ、さらに修士課程で地方分権法について研究中、結婚され夫君とともに渡米。

お二人とも趣味は山歩き、岩登り、映画、音楽など。

日本の印象についてシャンタルさんは、「この国について日々新しい発見があり、ぞくぞくするほど心ひかれます。興味深いのは新しさと古い伝統が同居していること。私たち西欧の人間は日本人の風習や文化とのふれあいで心豊かになります」とのこと。

早くも津市や四日市市で、シャンタルさんにフランス語を習おうという動きもあるようで、具体化したらお知らせします。

